

田舎 MICE 開催による日本 MICE の新たな可能性

～歴史の街・佐倉における中小規模 MICE モデル～

川口 博史

はじめに

I. 「観光立国日本」に向けての取り組み

II. MICE 開催事例

- (1) 香川県高松市の事例
- (2) 山形県山形市の事例
- (3) 福岡県福岡市の事例

III. 佐倉市の観光都市としての可能性

- (1) 佐倉市の街の様子
- (2) 佐倉市の可能性



(佐倉市公式キャラクター：カムロちゃん)

IV. 佐倉 MICE に向けて

おわりに



(佐倉市のシンボル風車：リーフデ)

はじめに

日本における観光事業の形態は大きく変化しており、「観光立国日本」の実現に向けて様々な政策が行われている。2020年に東京オリンピック(オリンピック・パラリンピック東京大会)の開催が決定し、開催に向けて国内で更なる観光立国推進事業、アクション・プログラム(「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」)が2013年から行われている。

それに伴い、観光都市のみならず各地方観光地域においても訪日客(外国人観光客)が観光しやすい環境づくり、SNS等の活用によるシティプロモーションが行われ、各地方に訪れる訪日客が増加しつつある。2015年に「爆買い」という言葉が流行したように、観光目当てばかりではなく、日本製品を求めて日本を訪れる訪日客も見受けられ、今後も「観光立国」実現に向けた動きを行うにつれて観光客の増加が見込める。

この傾向は対外プロモーションなどといったインバウンド振興策ばかりではなく、MICEの開催によって地方観光都市は知名度が上がったとともに、観光地として発展がなされた。様々な角度から「観光立国」としての歩みを進めているのである。

日本のMICEが更なる発展をしてゆくためには、主要観光地ばかりで開催するのではなく、観光資源は揃っているがあまり注目されていない地域で開催する必要がある。MICEの特性などを活かせる地域を開催地として広げてゆけば、MICE競争力拡大ばかりでなく、その後の観光事業拡大にも繋がるであろう。

そこで今回この論文を記してゆくにあたって、主要都市における大型MICEではなく、中小規模

のMICE開催によって今後の日本MICEの競争力拡大の可能性があるか、千葉県佐倉市を例に論じてゆく。

I. 「観光立国日本」に向けての取り組み

2013年より「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」が実施されており、アジアを始めとする世界の観光需要を取り組むことによって地域経済の活性化、雇用機会の増大などに繋げる取り組みが行われている。アクション・プログラムにおいては、

- ① 日本ブランドの作り上げと発信
- ② ビザの要件の緩和等による訪日旅行の促進
- ③ 外国人旅行者の受入の改善
- ④ 国際会議等(MICE)の誘致や投資の促進

を柱に立て、それぞれの問題解決を実施している(観光立国促進閣僚会議資料、観光庁HP)。

2020年にオリンピック・パラリンピック東京大会の開催が決定して以来、訪日外国人観光客4,000万人を目標に観光立国推進が図られている。アクション・プログラムがその取り組みの一環として、インバウンド新時代に向けた受入環境整備などの戦略的取り組み、地方創生に資する観光地域づくり、オリンピック開催後を見据えて国内観光の振興が積極的に行われている。

今日、特に力を入れて行われている事業はSNS等によるプロモーション事業である。各地方の観光地において、SNSを利用したプロモーションで地域特有の魅力を発信しながら、観光客が各地域に興味を持ってもらうための施策が

講じられている。日本の歴史・文化に高い関心を有しつつも、まだ十分に欧米から訪日需要を確実に取り組むべく、特に欧米を中心にプロモーションを積極的に行っている。

このような訪日プロモーションの実施に当たっては、JNTO（日本政府観光局）を中心に日本全体で行われており、日本の魅力を発信すると共にインバウンド戦略の強化を図っている。プロモーション事業以外にインバウンド戦略の一環として行われているものには、外国人観光客向けの無料公衆LANの整備、免税店の導入などが挙げられる。他にもLCC導入による航空機能の強化やビザ要件の緩和、多言語対応といった多くのインバウンド拡大施策を打ち出しており、近年増加傾向にある外国人の訪日の後押しをしているのである（**観光立国促進閣僚会議資料、観光庁HP**）。

ビジットジャパン事業が開始した2005年の訪日外国人旅行者は約521万人であったが、2015年には約1,974万人もの外国人観光客が訪れ、2005年と比較すると約3.8倍と大幅に増加している（**図-1、統計情報・白書、観光庁HP**）。

このように日本の観光事業は、観光立国実現に向けて更なる歩みを進めているとともに、2020年に向けて歩みを進めているのである。

II. MICE 開催事例

では、「観光立国日本」としての歩みを更に進めてゆくために、世界的に認知度を高めてゆくこと、日本のMICE競争力拡大を今後どのような取り組みを行なってゆけばよいであろうか。この章ではMICE開催事例とその開催事例から現在抱えている課題と解決策を検討してゆく。

MICEは各国で開催されており、日本においても開催されていて今日では更なる事業拡大が進められている。日本では、過去に札幌市や横浜市などの主要都市で開催されており、2015年6月には、宮城県仙台市、広島県広島市ら5都市が「グローバルMICE強化都市」として選定。その5都市を支援しつつ、各地域の関係者の連携の強化、都市の自律的な取り組みを促しながら2030年までに「国際会議開催国アジア1位」を目標に日本MICEの強化を図っている（**観光立国促進閣僚会議資料、観光庁HP**）。

日本MICEの更なる強化を図るために、実際にMICEが開催された香川県高松市、山形県山形市、福岡県福岡市を例に挙げ、日本MICEの現状を把握してゆきたい。

(1) 香川県高松市の事例

まず初めに、香川県高松市の事例である。高松市のMICE推進主体である高松CVB（高松観光コンベンション・ビューロー）は2011年に地域の特産である盆栽をテーマにした国際会議である「アジア太平洋盆栽水石大会」の誘致に成功した。この会議を誘致にするにあたっては、地域の盆栽生産者や香川県等に協力を仰ぎ、産・官が連携しながら誘致・開催が行われた。更には、大会当日に盆栽園巡りをプログラムの中に組み込むなど、地域資源を最大限に活用して地域一体となって成功を収めた（**国内モデル都市事例紹介集（MICE）、観光庁HP**）。

高松市に大会誘致活動を行うにあたって、2つのことを要点に置いて実施した。

1つ目に地域が一体となって誘致活動を実施したことである。高松CVBが中心となって香川県の盆栽生産者等と協議・協力をしながら誘致

活動を行なった。東京都に拠点を置く日本盆栽協会、日本水石協会日本盆栽共同組合に協力依頼を要請する等、県外の団体に対しても積極的に協力を依頼し、学会のキーパーソンをインドネシアから招待し、高松市の魅力を伝える活動を行った。また、MICE 前回大会にあたる 2009 年台湾大会に、高松市長や関連事業者をなどが参加し、高松市開催を積極的にアピールした(国内モデル都市事例紹介集 (MICE)、観光庁 HP)。

2 つ目に大会開催においても地域一体となった受け入れ体制を構築したことである。受け入れ体制を構築する際、香川県から施設の提供を受け、地域の事業者からは大会のプログラムに盛り込まれた地域の盆栽巡り、盆栽の特別展示の実施、ボランティアスタッフの募集等において幅広い協力を得ている。また、地域内事業者の協力の下、盆栽園巡りの他にも、茶道体験、書道体験などの日本文化の体験プログラムを数多く盛り込むなどをして、地域特産をテーマにした事業は海外から大会に訪れた人に好評を受けた(国内モデル都市事例紹介集 (MICE)、観光庁 HP)。

高松市モデルでは、地域の特産品である盆栽を中心に日本の文化を世界に PR することに成功した。高松市 CVB が中心に地域の人々が連携することにより、主催者やボランティアスタッフが地域に対する認識を深めるとともに、地域や特産に対する重要性をふかめる、再認識を促す副次的な効果が出たであろう。

(2) 山形県山形市の事例

次に、山形県山形市の事例である。山形 CVB (山形市観光コンベンション・ビューロー) は、

MICE 開催するにあたって 2 つのことを要点に置いて実施した。

1 つ目に緻密な事前調整を踏まえた既存施設の有効活用である。山形 CVB は温泉旅館を活用した国際会議開催モデルを実施した。一般的に、国際会議参加者に利用される宿泊施設は海外から訪れる人が多いことからベッド等を備えたホテルが多く利用される。しかし、ホテルが開催地域内に少なく、必要な宿泊ホテルが十分に確保出来ない状況である。そこで山形 CVB は温泉旅館を国際会議参加者に宿泊施設として提供すること自体をユニークプランとして供したのである(国内モデル都市事例紹介集 (MICE)、観光庁 HP)。

温泉旅館での開催を提案するにあたっては、ビジネスホテルとの価格差や、海外からの国際会議参加者が布団で寝ることを不慣れであるといった課題が想定された。そのため山形 CVB は、繁忙期や週末を避けた開催期間の国際会議を狙い、宿泊価格を抑える対策を採った。また、食事プランを旅館と交渉・調整をおこなったことや、和室に泊まる海外参加者のために布団の利用方法等を英語表記した資料を作成するなど、海外参加者への配慮を行うために緻密な事前準備が行われたのである(国内モデル都市事例紹介集 (MICE)、観光庁 HP)。

2 つ目に既存情報活用等による低コストで情報発信媒体を開発することである。山形 CVB では MICE 参加者へ周辺の観光情報や交通情報を提供するアプリを開発し、無料配布をした。これは予算の制約による経費節減のために行われた。一般的にアプリ開発は初期費用が高額であり、運用に関する費用が発生するのではあるが、山形 CVB では、組織内に蓄積している観光情報の活用や職員自らが情報を掲載することによって、

それらの費用削減に成功した。また、将来的な活用のためにアプリの利用者にアンケートを取れるような仕様としており、低コストで高い効果を得られる工夫が施されたのである（国内モデル都市事例紹介集（MICE）、観光庁HP）。

山形市 MICE は、温泉旅館を筆頭に山形市が現在持ち合わせている資源を最大限に活用したモデルであり、専用アプリの製作など、現代の技術を活かしたモデルとなっている。山形市 MICE は地域との関係を保ちつつ、現在の資源最大限に活かすことのできるモデルとなっている。また、宿泊施設などの施設を新設する必要がないため、経済的にも良いモデルとなっているのである。

（3） 福岡県福岡市の事例

最後に、福岡県福岡市の事例である。2014 年 4 月に福岡 CVB（福岡観光コンベンション・ビューロー）の誘致部が組織強化され、新たに MPF（Meeting Place Fukuoka）という呼称で設置された。誘致部から MPF へと組織強化される際、活動資金が大幅に増加されたことにより、海外見本市出展事業の対象拡大、招聘事業の強化、パンフレットやビデオ、産業 Map 等のツールの新設・充実など、活動内容の拡充がなされた（国内モデル都市事例紹介集（MICE）、観光庁HP）。

福岡 MICE は長期的な取り組みで多様な主体の巻き込みに成功することができたことができたことが大きな特徴である。福岡市では、複数の戦略的な成長産業を設定しているが、その実日本における MICE 開催地域は、主に観光都市として知名度の高い地域が開催地域として選ばれる傾向にある。しかし、それら主要観光都市は他の観光地域と比較すると既に観光と

現に向け、地場産業と海外を繋ぐ MICE の振興を成長戦略の中核に据えていた。この戦略に基づき、福岡市及び産学官民一体となって設立された FDC（福岡地域戦略推進協議会）は、ホテルや PCO 等、直接的に MICE と関わりのある業種だけではなく、商社や銀行など多様な企業を巻き込んで、MICE 振興の必要性やヒト・モノを呼び込み交流させるための仕組みとしての MICE の重要性について 2 年間の勉強会を実施した。その結果、福岡市として MICE 振興を推進することに対するコンセンサスが醸成され、人的・資金的に MPF の活動をサポートする企業を獲得することを可能にした（国内モデル都市事例紹介集（MICE）、観光庁HP）。

福岡 MICE は MICE の勉強会を実施することによって商社や銀行など多様な企業に MICE の必要性・重要性を周知することに成功した。また、現在使用できる技術を最大限活かすことにより、産業の成長を促しつつ MICE の開催に成功したのである。

MICE 開催は観光都市・観光地域の知名度向上、ブランド力向上が見込める。しかし、知名度向上ばかりではなく、関係者の地域愛着心促進、産業の発展も促進している。また、過去の反省が生かされ、尚且つ既存の情報媒体を活用するなど、時代やニーズに沿った MICE が開催されているのである。

III. 佐倉市の観光都市としての可能性

して海外からの認知度は高く、日本の MICE 競争力を拡大するためには主要都市ばかりではなく、地方観光地、特に観光資源は整いつつも注目度の低い地域に着目する必要がある。

そこで、今後 MICE を開催するうえで適している観光地は千葉県佐倉市が良いと考えた。佐倉市は観光資源が整いつつも未だ MICE 開催を予定していない。ではなぜ、他の地域と比較して佐倉市には MICE 開催の可能性があり、他の地域と比較すると優位な立ち位置にあるのかについて、順を追って論じてゆく。

(1) 佐倉市の街の様子

まず始めに佐倉市の観光資源について述べてゆく。佐倉市の歴史は古く、江戸時代に佐倉藩

がこの地を治めており、佐倉城があったことから現在も城下町の面影が色濃く残っている。佐倉城の址地には、人間文化研究機構であり、最初の国立博物館で全時代にわたって研究・展示をしている日本で唯一の博物館である「国立歴史民俗博物館」がある。また、幕末の老中であり旧佐倉藩の藩主・堀田正睦が生前暮らしている、現在では国の重要文化財となった旧堀田邸が現存している。他にも駅周辺には武家屋敷や佐倉順天堂記念館などといった歴史的建築物や伝統的な街並みが広がっており、日本の歴史を感じてもらえるような観光資源が色濃く残っている（特定非営利活動法人まちづくり支援ネットワーク佐倉 HP）。



(佐倉市佐倉順天堂記念館、8月22日、筆者撮影)



(佐倉市歴史民俗博物館、8月22日、筆者撮影)

しかしなぜ、観光地としてたくさんの魅力的な観光資源があるにもかかわらず、観光地としてあまり注目されていないのであろうか。その理由は、「これまでの千葉県全体の観光業界では、主に国内観光客の誘致ばかりに力を入れていなく、訪日客の誘致に対する意識はそれほど高くはない。」という点にあった。この理由として挙げられることは、外国人観光客の県内訪問地の偏りがあり、特に訪問される場所は空港やディズニーランドである。そのため、県全体での観光に対する意識は希薄であり、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会に向けた対策が打ち出されていない状態にある。

佐倉市もまた例外ではない。私が訪れた佐倉市観光協会のお話によると、『佐倉市は特に駅周辺に広がる城下町地域では外国人観光客流入に向けた対策が依然として打たれておらず、今後もほとんど白紙の状態にある。』とのことだった。

実際に佐倉市内を調査した結果、施されていた対策は歴史建造物などの説明に用いられている文章を英語翻訳してある程度である。それ以外では他の観光地でも行われているネットワークを用いた佐倉市内の説明がされてあるホームページがある程度で、特別行われているものはなかった。また、観光客誘致に欠かせない宿泊施設は城下町周辺で4つしかないということも1つ大きな問題点となっている。宿泊施設増設は地域の景観を損ねてしまうという考えの下、なるべく増設せず、駅に近いという立地を活かして途中で立ち寄れるような観光地を目指して観光客増加を図っているとの方針であった。しかし、現段階で方針が決まっていない状態である為、2020年に向けての観光客の更なる増加は見込めないであろう。

佐倉市が特に問題視すべき点は、佐倉市にある「国立歴史民俗博物館」の来場者数が東京都墨田区にある「江戸東京博物館」よりも劣っているという点である。2008年年度の江戸東京博物館の来場者数は874,312人（**受託事業資料平成20年度版、江戸東京博物館HP**）であるのに対し、国立歴史民俗博物館の同年次の来場者数は176,593人（**平成20年版、人間文化研究機構HP**）と少なく、約20パーセントと差がついている。

（2） 佐倉市の可能性

観光地として発展していない佐倉市ではあるが、ではなぜ他の観光地よりもMICE開催地としての可能性があるといえるのであろうか。MICE開催をするに当たって、いくつかの必要条件がある。

1つ目は、「アクセスが良い」という点である。MICE開催地の近隣空港に海外の直行便があるか、直行便数の多さ、空港からMICE開催地までのアクセスは良いか、など、MICE開催する上で外国からの訪問者になるべく負担がないような配慮が必要となる。

2つ目は、「MICE開催地における施設が、MICE開催してゆく上で適しているか」という点である。このことは、より大きな施設を利用することによって訪問者を多く受け入れをする体制を整えるためである。

3つ目は、「宿泊施設がMICE開催するに当たって適しているか」という点である。訪問者の負担を減らすため、主催者が余裕を持ってプログラムを組めるようにするために、宿泊施設から開催地までの地域が適しているか、多くの訪問者を受け入れるためにも宿泊施設の客室が多

いか、など、MICE 開催地が訪問者受け入れ体制の確立のしやすい地域かが、開催地域を選択する必要条件となる(MICE 選考基準、国土交通省HP)。

この3点は、MICE 開催の必要条件として挙げられるが、4つ目として必要となる条件があると考え。それは「現在ある資源を活かすことができるか」である。MICE 開催が決定した段階で宿泊施設などMICE 開催に必要な施設が整っているか、施設増設することができる土地と資金がある。しかし、ある程度の設備が整いつつも施設の増設が難しい地域は、MICE 開催の可能性が小さくなってしまふ。また、MICE 開催後に施設を使用しなくなってしまう可能性も考えられるため、現在持ち合わせている資源を活用することによって経費節減にも繋がり、更には増設など時間のかかることが減るので、早期でMICE 開催を実現できるであろう。

このような条件を加味すると、佐倉市は利便性の面でMICE 開催地として発展していくことのできる地域だと言えるであろう。佐倉市は、千葉県の中央に位置しており、東京都から近くに位置している。佐倉市にはJR線以外に成田空

港と羽田空港を直通で結ぶ京成電鉄(京成電鉄株式会社)・京急電鉄(京急電鉄株式会社)が通っており、成田空港から約40分、東京から約1時間と観光客が電車で訪れやすい場所に位置している上、高速道路の出入り口があるため、交通インフラが比較的整った地域であり、観光客にとって利便性の高い地域なのである(参照:佐倉市観光ガイドブック)。

私が今回、特に注目した地域はJR佐倉駅と京成佐倉駅の間に位置する地域である。この2駅は乗り換えるのに約40分程度かかってしまうが、その間の地域には城下町の町並みが広がり、歩いて行ける距離に冒頭で挙げた歴史民俗博物館や歴史的建造物が点在する。その区間にはバスが運行しており、歴史を感じながら通ることも可能であり、駅の近くにはレンタルで自転車を借りられる施設があり、サイクリングで佐倉市を観光もできる。訪日客が増加しつつある現在の日本において、日本の歴史を直に感じてもらえる地域は貴重であり、佐倉市はその資源があるため観光地として今後発展してゆく可能性があるのである。

京成佐倉駅、JR 佐倉駅間の様子



(出典：千葉県佐倉市公式 HP より)

佐倉市の観光事業は「観光立国実現に向けたアクション・プログラム」の影響により、年を追うごとに発展していく可能性がある。2014年に千葉県を訪れた外国人観光客はディズニーランド、成田空港の恩恵を受けて都道府県訪問率が全国でも上位に位置しており(図-2)、特に成田空港のある佐倉市が属する印旛郡における訪日外国人宿泊数は、他の地域と比較しても圧倒的な高さを誇っている(図-3)。

このことは成田空港利用者が周辺地域に宿泊するためであるが、佐倉市観光協会が目指す途中で立ち寄れるような観光地が実現できれば、

佐倉市が観光地としての更なる発展が見込めるのではないであろうか。

佐倉市は特に外国人が受け入れやすい日本の文化を学び、体で感じることのできる施設が多い。つまり、日本が目指す観光立国実現に向けての過程の中で、新たな観光地、MICE開催地域として発展していく可能性が秘められた地域なのではないかと考えられる。

MICE開催の実例として挙げた3地域と比較すると、佐倉市は観光資源、特に交通インフラ面で3地域のみならず他の地方観光地域より優位な位置にある。これは千葉県が首都圏に位置していること、主要空港である成田空港が近いと

ということが主な要因となっており、佐倉市はその恩恵を受けながら MICE 開催地として、そして観光地として発展してゆくことが可能であると言える。平成 27 年度の国際線乗降客数を比較すると、福岡空港は約 464 万人、高松空港が約 15 万人（航空関係情報・データ、国土交通省 HP）である一方で、成田空港は約 3,060 万人（図-4、空港の運用状況、成田国際空港株式会社 HP）と、福岡空港の約 6.6 倍、高松空港の 204 倍と差は歴然である。

IV. 佐倉 MICE に向けて

これまで、佐倉市の可能性と優位性を述べてきて、佐倉市における MICE 開催が比較的現実的であると言える。そこで、実際に開催モデルを作成し、実際にどのような MICE が行われるか、開催後どのように招致すれば良いか検討してゆく。

例えば、佐倉で MICE を開催するにあたって、街の特徴から歴史・民族などを研究している学会を招致することが良いであろう。特に佐倉市には国立歴史民俗博物館などがあり、歴史・民俗文化を研究するのにふさわしく、それらを研究している学会を呼ぶのに適している。MICE 開催するにあたって、移動型エクスカーション形式を導入すれば良いのではと考える。エクスカーションとは、訪れた場所で案内人の解説に耳を傾けながら参加者も意見を交わし、地域の自然・歴史・文化・社会資本の果たす役割など学び考え、理解を深める「体験型見学会」のことである。

近年のエクスカーションの例として、2014 年に東京での日韓観光交流拡大シンポジウムの一環として、韓国関係者が宮城県仙台市、松島町

を訪れたことなどが挙げられる（韓国旅行業協会東北訪問について、国土交通省東北運輸局 HP）。今までの日本 MICE は、移動型（案内されながら）のエクスカーション方式が取り入れられていなく、会議後に行なわれることが多い。佐倉市の特性を活かす MICE 開催は、移動型のエクスカーションが適しているのではないだろうか。

そこで、佐倉市の特性を活かしつつ、移動型エクスカーションの導入をした開催モデルの参考として、2016 年の 9 月から 12 月にかけて開催されている「千葉県地方創生加速化交付金事業モニターツアー」（以下、千葉県モニターツアー）を参考にする。

この事業は、京成電鉄を含む私鉄 3 社、そして京成トラベルサービス株式会社が共同で千葉県と連携して、京成グループの鉄道をはじめとした交通機関と沿線エリアの観光施設の利用を組み合わせた日帰りバスツアーである。一例を挙げると、佐倉市のコスモスフェスタの時期に合わせて日本遺産巡りプランなど格安日帰り旅行プランを提供している。この事業で観光客誘致、さらには地方創生を目的とし、日本の観光事業の活性化を目的としている（千葉県地方創生加速化交付金事業モニターツアー、京成グループ HP）。

この佐倉市における開催モデル（以下、佐倉モデル）の一番の特徴は、佐倉の地域に歴史建造物が近場に集中していること、交通インフラが整っていることである。地域内は 1 日で回ることができ、移動型のエクスカーションが可能と考えられる。

佐倉モデルを実現するためには各施設間の移動の工夫をしなければならない。佐倉市は MICE 開催後も観光客が訪れやすい環境にあるため、千葉県モニターツアーのような開催モデルが組

めるのではないかと考える。例えば、日本遺産巡りに加えて体験型のアトラクションなどをプランに加えるなどが挙げられる。

佐倉市は歴史の街というコンセプトに売り出しているため、武士体験や「下総染」の染物体験などをプランに入れることによって、外国人にも受け入れやすいプランとなる。また、この佐倉モデルを軸に、千葉県モニターツアーのような新たなツアープランが組めるのではないかと考える。

しかし、懸念されることが2つある。1つ目に、大型のホテルが開催地域に無いという点である。2つ目に、コンベンションを開くことのできる施設が地域にないことである。MICE開催の条件に「MICE開催地における施設がMICE開催してゆく上で適しているか」、「宿泊施設がMICE開催するにあたって適しているか」が挙げられるが、宿泊施設とコンベンション会場がないという点が大きな問題となりうる。建設を行えば良いが、地域住民の兼ね合いなども考えると難しいものである。

しかし、4つ目に挙げた「現在ある資源を活かすことができるか」という点から、現在活用できる資源での開催が可能である。例えば、宿泊形態を民泊形式にすること、コンベンション会場として国立歴史民俗博物館内にある講堂やガイダンスルームを使用することなどが挙げられる。近くに大学があり、大学の施設を利用することも可能である。現在の資源を利用することによって経費節減に繋がるであろう。また、大学を利用することから、エクスカージョンで研究者や学生と学術交流も図れる。近場に大きな宿泊施設がなく、宿泊施設は近隣住民との兼ね合いもあり、今後も建設される予定はないというが、宿泊施設増設をするとすると土地や資

金がたくさん必要となり、開催後にも維持しなければならなくなる。元々途中で立ち寄れるような観光地を目指していたため、近隣地域と連携することによって従来のMICEの様に大規模MICEではなく、経費節減をしながら繰り返し開催できる佐倉モデルの様な中小規模MICEの開催が望ましい。また、宿泊施設の価格差を抑えることもでき、空港とコンベンション会場の移動が楽になるため、参加者の移動に対するストレスを減らすことができることも良い点である。民泊を宿泊施設として代用することも佐倉モデルのユニークプランの1つとして組み込むことができ、エクスカージョンも交えた中小規模のMICE開催が可能となる。

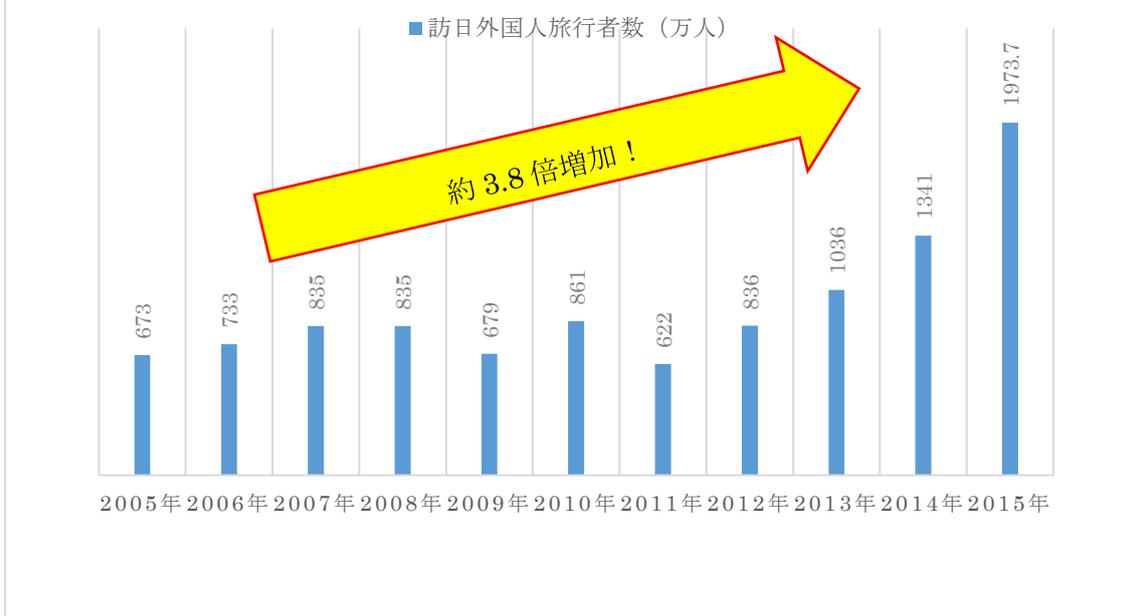
MICEを開催するためには宿泊施設や会議施設などの整備、施設間の移動の工夫が必要となるが、それ以上に地域やMICEに参加する企業・自治体が一体となった総合力で開催に向けた努力が必要となる。また、MICE開催後に訪日客が安心して、快適に過ごせる街づくり、伝統など地域が持つ特性を活かした街づくりをすることによって日本観光業界の国際競争力の向上を図る必要がある。MICE開催後には、SNSなど口コミを介した知名度の向上、訪問者数増加に伴う経済効果など、様々な方面で良い効果が見込める。MICE開催を起点に地域の観光モデルの確立、そして地域創生にも繋がる。

現在のMICE開催地は観光資源や受け入れ体制の確立がされていることなどの理由から、観光都市ばかりに集中している。今後、日本MICEの競争力拡大を図るためには、観光都市ばかりではなく、佐倉市の様な観光地として注目度の低い地域において中小規模のMICEを開催することで、地方創生をすると同時に日本MICEの競争力を拡大してゆけば良いのではないだろうか。

おわりに

これから日本のMICE競争力拡大に向けた動きは、東京オリンピック開催に伴い加速することが見込める。同時に、観光客が訪れる地域の偏りなどから地方と都市における格差が更に広がってしまうことも懸念される。地方創生など地方に目を向けた取り組みがなされている今日の日本では、その取り組みの1つとして訪日客に地方へと足を運んでもらうかについて、更なる検討が必要となってくる。MICEも訪日客が地方へと足を1つの要因として考えられ、実際にMICE開催後に開催地へと訪れる訪日客が増加したことが実情である。佐倉市のようなMICE開催モデルは、一定の条件さえクリアすれば、大都市でなくともMICE開催が実現的であることを示したモデルである。佐倉モデルのような中小規模のMICE開催が現実的と地方創生への1つのきっかけとなりうるのであろう。

図-1、訪日外国人旅行者数



(参照：訪日外国人旅行者数推移、国土交通省 HP)

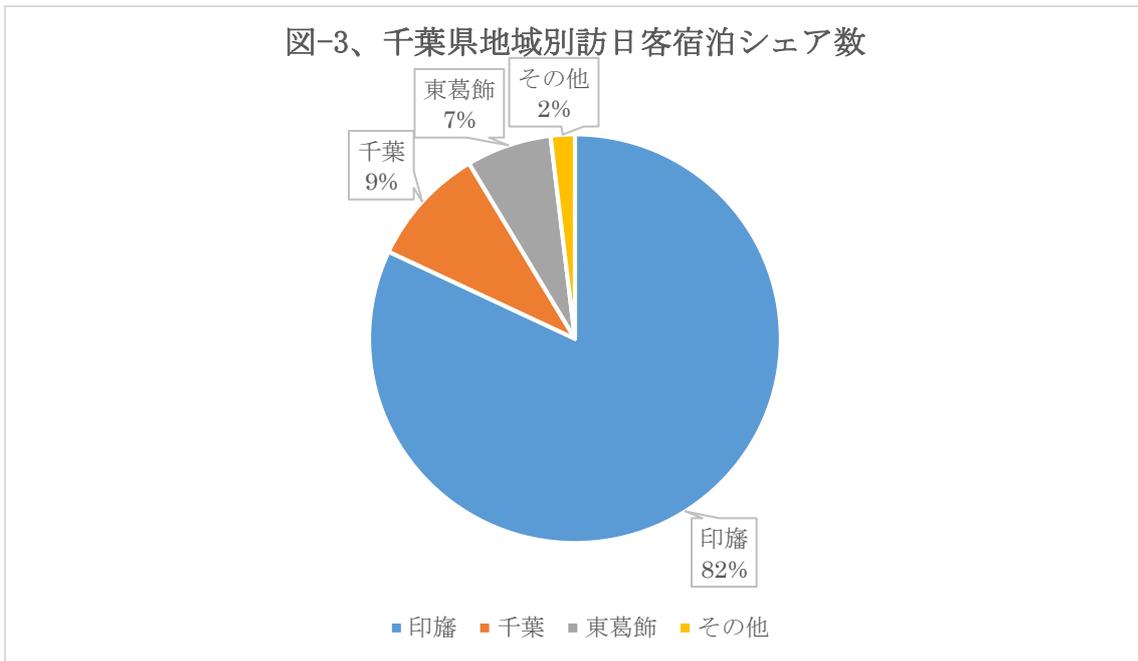
図-2、都道府県別訪問率

(単位: %)

2011年(注)		2012年		2013		2014(注)	
1	東京都 49.8	1	東京都 50.5	1	東京都 43.2	1	東京都 48.5
2	大阪府 32.4	2	大阪府 30.1	2	大阪府 30.2	2	大阪府 33.4
3	京都府 23.3	3	京都府 23.4	3	京都府 24.9	3	京都府 26.9
4	福岡県 12.6	4	北海道 13.0	4	福岡県 14.1	4	千葉県 14.2
5	神奈川県 12.3	5	福岡県 12.7	5	北海道 12.1	5	神奈川県 12.2
6	北海道 11.7	6	神奈川県 12.5	6	千葉県 11.1	6	北海道 11.5
7	千葉県 9.9	7	千葉県 11.3	7	神奈川県 10.3	7	福岡県 11.2
8	愛知県 9.6	8	愛知県 8.6	8	大分県 7.7	8	愛知県 9.2
9	山梨県 7.2	9	山梨県 8.5	9	山梨県 7.4	9	兵庫県 6.9
10	兵庫県 6.9	10	大分県 6.6	10	愛知県 6.9	10	山梨県 6.5

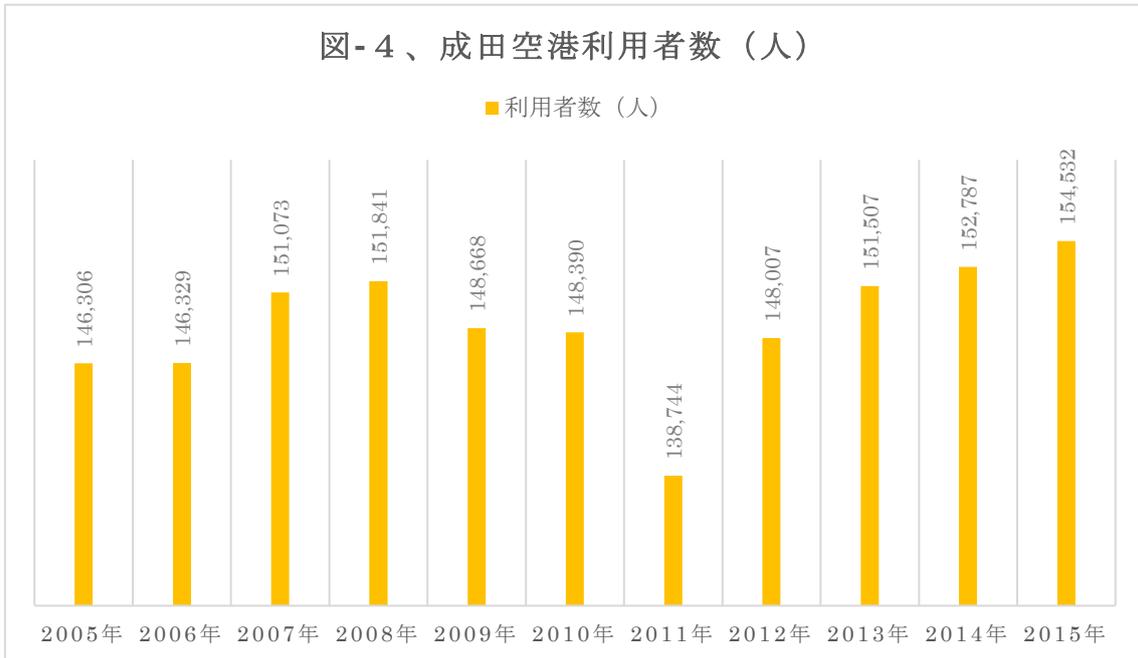
(出典：訪日外国人観光客誘致の積極化による地域活性化、ちばぎん総合研究所 HP)

図-3、千葉県地域別訪日客宿泊シェア数



(参照：訪日外国人観光客誘致の積極化による地域活性化、ちばぎん総合研究所 HP)

図-4、成田空港利用者数（人）



(参照：航空の運航状況、成田国際空港株式会社 HP)

<参考文献一覧>

観光立国促進閣僚会議資料、観光庁 HP (2016年6月2日アクセス)

<http://www.mlit.go.jp/>

統計情報・白書、観光庁 HP (2016年6月2日アクセス)

<http://www.mlit.go.jp/>

訪日外国人旅行者数推移、国土交通省 HP (2016年6月13日アクセス)

http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukuei/in_out.html

国内モデル都市事例紹介集 (MICE)、観光庁 HP (6月13日アクセス)

<http://www.mlit.go.jp/>

特定非営利活動法人まちづくり支援ネットワーク佐倉 HP (2016年6月22日アクセス)

<http://net-sakura.jimdo.com/>

千葉県佐倉市公式 HP (2016年6月22日アクセス)

<http://www.city.sakura.lg.jp/>

受託事業資料平成20年度版、江戸東京博物館 HP (2016年7月3日アクセス)

<https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/>

平成20年版、人間文化研究機構 HP (2016年7月3日アクセス)

<https://www.nijl.ac.jp/>

MICE 選考基準、国土交通省 HP (2016年8月5日アクセス)

<http://www.mlit.go.jp/>

訪日外国人観光客誘致の積極化による地域活性化、ちばぎん総合研究所 HP

<https://www.crinet.co.jp/> (2016年8月24日アクセス)

航空関係情報・データ、国土交通省 HP (2016年10月30日アクセス)

http://www.mlit.go.jp/statistics/details/cab_list.html

空港の運用状況、成田国際空港株式会社 HP (2016年10月30日アクセス)

<http://www.naa.jp/>

韓国旅行業協会東北訪問について、国土交通省東北運輸局 HP (2016年11月2日アクセス)

<https://www.tb.mlit.go.jp/>

千葉県地方創生加速化交付金事業モニターツアー、京成グループ HP (2016年11月5日アクセス)

<https://www.keisei.co.jp/>

(2011) 季刊誌『展示会と MICE』

ピーオーピー出版企画室

佐々木一成 (2011) 『地域ブランドと魅力のあるまちづくり』

学芸出版社